

つちの上に座って感じたこと

大矢一成

今年、つちのいえのメンバーで作った「竈門」の火を囲む。竈門から立ち上る煙や熱は、竹組みの上にある茅に吸い込まれていく。早朝に積もった雪が溶けて湿っている外屋根からじんわりと湯気が上がる。「屋根が笑っている。」と井上先生がおっしゃった。

ほの暗いつちのいえの中、土間ベンチに腰掛けながらお尻に伝わる土の温度と共に、専攻や学年や教員や学生という立場、今まで携わってきた人たち、更に国境や時代をも超えてこの空間が存在していることの「当たり前のような奇跡」を感じていた。

つちのいえのテーマ演習教員メンバーになって2年。丘の上にあることは知っていたけれど、自分が関わって初めてこのつちのいえの存在の豊かさがわかってきた。

ただ土を掘る、土を運ぶ。土を捏ねる、土を手でぬる。型に入れて日干し煉瓦を作る。慣れない手つきの草刈りも、よろけながらのツルハシでの穴掘りも、次第にコツを掴み腰が入ってくる。

自分たちのやりたいこと、できるかどうかわからないことも、土でなら、つちのいえなら出来そうな気がする。ほとんどすべてのことが初めてで、やればやるほど何かに気づく。そうやって自分の興味と経験がつながっていつているつちのいえのメンバーはとてもいい顔をしている。私は普段漆や木工を担当しているが、制作を通して掴んで欲しいことの根底にあるのは「どう生活すると自分は幸せとを感じるのか。」ということなのだと思う。

あるものは工夫して使う、ないものは想像してつくる。世の中がどうやって動いてきたのか、一つのものを作ることから感じ取ること。そして自分はその奔流の中のどこにいたいのか。

私は電気や蒸気機関動力やエンジンのなかったときのものづくりのあり方に興味がある。それはほんの100年ちょっと前までのことであり、そのものづくりの基本工程はすでに縄文時代には確立されていた。自然からの恵みを食し、身にまとい、住うという、人が人として生きるのに必要な、基本的な物の加工という創造行為は、12000年前と今と何ら変わりがなのだということに認識する時なのだと思う。電気がないということは、自分たちの手で動かし、形を変えていくということ。素材の特性を熟知すること。昼と夜、季節の違いを感じて生きること。人力ではできないことは自然の大いなる力に任せること。節目があっても切れ目はないこと。つまり自然界の時期と摂理に争わずに喜びを見出すこと。

この10年余りの地震、台風、大雨などの自然災害と新型ウィルスの感染によって、人のもつ基本的な力が試されてると感じる。防潮堤やダムや電気、水道のようなインフラやネットワークの整備に頼るだけではない、基礎体力や知恵や工夫のような、個人レベルのインフラの強化、何があっても生き延びられるんだというような自信のようなものを鍛えることで真に美しい生活が生まれるのではないかとおもう。

土に座る、土に触れること自体、この極度に清潔を要求される時代において、既に非日常となってしまう。

しかし、つちのいえではそれが自然なのだ。

壁に土を塗ったその時から、自分の家のように感じてしまうこのつちのいえ。ここから巣立った先輩方や先人の姿を立ち上る湯気の中に見ながら、これから訪れる人を待とうと思った。

(木漆工芸作家、京都市立芸術大学工芸科漆工専攻准教授)



2020年10月29日 日干しレンガづくり



2020年12月17日 できたての囲炉裏を囲んで